空き容器を用いた湯たんぽ

看護用品の解説

ガラス製のリンゲル瓶を使用後，ゴム栓を押さえている金具を外し，その中にお湯を入れて湯たんぽとして使用した。口はテープでしっかりと固定した。その際，やけどに最も注意し，何枚かのタオルでくるんで使用した。

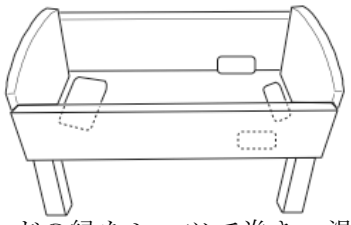
またガラス製のリンゲル瓶は，腎炎の患者さんの蓄尿瓶としても使った。

看護用品にまつわるエピソード

小児科といっても当時は成年期や老年期の患者さんも多く入院していたため，体の大きい患者さんにはその湯たんぽを２ー３本使っていた。その後内服薬をつめたプラスチック製の容器が出てきたため，ガラスのリンゲル瓶の代わりにそれにお湯を入れて湯たんぽとして使った。プラスチック製の容器だと割れることもないので安心だったが，その時もやけどに注意し，何枚かのタオルでくるんで使用した。

（嘉陽サチ子氏，2003）

湯たんぽ



ベッドの縁をシーツで巻き，湯たんぽはバスタオルで巻いて足下とベッドの両側に置いて保温した。

看護用品の解説

小児科などで，使用後のガラス製のリンゲル瓶のゴム栓を外さずに，湯たんぽとして使用した。☒

看護用品にまつわるエピソード

保育器の数が限られていたため，体温調節機能が十分に行えない未熟児に対して使用した。使用方法は，使用後のリンゲル瓶に注射器を使って水を入れておき，湯たんぽとして使う時に湯煎した。金具でゴム栓が留められていて，湯煎のための温度はそれほど高くなかったので，湯煎をする時にエアー針を入れたりはしなかった。できた湯たんぽの温度は手で触って確認し，それをタオルにくるんで，患児の体から何 cm の所，というように患児の届かない所に置いた。

使用する際には必ず婦長さんの了解を得てから行わねばならなかった。婦長さんは「患者さんにやけどをさせると大変」と言い，常に湯の温度を確認していた。その後湯たんぽが出てきたけれども，手軽にできることから，気が緩んでやけどをさせないかと余計に怖かった。

（西平富美子氏，2004）

解説

専用に作られた物とは異なる代用品を使う上で，危険を防ぐために何度も確かめる，という意識が強かったことが伺える。少しの油断も危険につながることから，物の使い方へのポイントを明確にしていたと考えられ，このことは看護技術を適用していく上でのポイントのひとつといえる。

またそれ専用の物が出てくると油断する，という心理的に陥りやすいエピソードも看護技術を適用していく上で意識していかなくてはいけないことである。

（金城忍，2004）